常葉大学教育学部紀要
第37号　　2017.3.　　43頁～　55頁

# 言葉による教育の原理および方法に関する研究
## －『入木抄』を中心とした書論の記号学的分析を通じて－
## (2)バルトの諸概念と教育論①

古　市　将　樹

A reseach about educational principle and technique, which based words
—A case study : Analysisof“Jubokushou”and other “Shoron’s (Calligraphy theorys) by the knowlege, experience, philosophy of the semiology—
(2) Several concepts in Roland Barthe’s Educational Theory ①

Masaki FURUICHI

2016 年 11 月 18 日受理

**抄　　録**

本稿では、言葉による教育の原理および方法を、『入木抄』を中心とした書論の記号学的分析を通じて分析する、本研究の第二弾の①として、分析において重要となる、エクリチュール、コノタシオン、デノタシオンほかの、ロラン・バルトの諸概念を確認する。もともと思想家としてのバルトは、言語がイデオロギーやドクサになる構造を明らかにし、そこからいかに逃れ得るかを探っていた。そうした彼の研究と諸概念は密接に関係している。そこで本稿では、諸概念が提出されるに至った経緯を、バルトの思想・記号学の変遷に沿いながら論じている。

キーワード：エクリチュール、コノタシオン、デノタシオン、レトリック、テクスト

### 承前

前稿では、本研究の主な分析対象である尊円親王『入木抄』に着目した問題意識と、分析手法について記し、サンプルとして、バルト（Roland Barthes：1915 年～1980 年）の用いた分析的概念としての「デノタシオン」(dénotation) と「コノタシオン」(connotation) を使って、『入木抄』のテクスト分析を試みた。その結果、『入木抄』の第一条に相当する「筆を取事」の条についてのみではあるが、親王のテクストは、教育的視座をもった立体的な構造になっていた。だが、今後本研究で用いるのはそれらの概念だけではない。また、記号学的にテクスト分析をおこなうのであれば、ヨーロッパの記号学の流れの中だけでも、エーコ（Umberto Eco：1932 年～ 2016 年）、

クリステヴァ（Julia Kristeva：1941 年～）ほかの先行研究があるが、なぜ特にバルトなのか。それは、彼の哲学的・記号学的知見にもとづく教育論にも注目したからである。彼は、教師としての自身の経験をふまえて、教育（教師の言葉）についても分析している。本稿は、『入木抄』の分析をおこうなう予備的研究として、バルトの哲学的・記号学的知見を整理し、特に彼に注目する理由であるバルトの教育論について概観的に論じることを目的とする。

## 1．バルトの思想と記号学の概要－導入として－

まずはバルトの思想や記号学について概略を記しておきたい。

研究者としてのバルトは、フランスの、構造主義を代表する哲学者、記号学者、そして批評家などと称されてきた（以下それらの意味を含めて「思想家」とする）。存命中に学術界に与えた、そして死後も後世に与え続けている影響は大きく、「大思想家」(1)のひとりといわれている。バルトがおこなった様々な研究の独創性はもとより、彼が考案・提案した様々な概念が多くの研究者によって使われていることからして、そのようにいわれることは決して誇張ではない。また、教育者としては、高等研究実習院（École pratique des hautes études〔略称 EPHE〕；フランスの高等教育・研究機関）教授、コレージュ・ド・フランス（Collège de France）教授などを歴任した。講義やセミナーで教えた経験は、バルトの教育論（その内容は、記号学的な教育分析というのが適切であろうが）として特に彼の晩年に発表されている。

特定の人物に焦点化した従来の研究に多くみられるように、バルトについても先行研究ではしばしば彼の人生・生涯・経歴などに触れられている (2)。これは、その人物の思想（の特に起源的な部分やターニング・ポイント）を理解する手助けになる場合があるからであるが、それはとりもなおさず、分析対象が、そうするだけの意義がある、所謂大物であるからでもあろう。バルトの場合もそうであるが、加えて、彼ほど著書で中で自分の生涯について触れている思想家も珍しい。それは、彼が、自分自身を相対化して分析の対象としてきたからである。

バルトは、幼くして父親を亡くし母親とのひじょうに濃密な関係の中で成長し、肺結核を患い二十歳代の大半を療養生活に費やし、ホモ・セクシャルであった。当時のフランス社会において、家族関係、健康、セクシャリティなどの部分で、彼はマイノリティであった。そうした経験をもつバルトは、マジョリティのものの見方や考え方・感じ方が、慣習的・支配的・常識的なものとなり、さらには権威、権力、そして価値観などを形成していると考え、異議を唱えた。いや、それ以上に、「なぜそうなっているのか」「なぜそれらが一般的に受け入れられているのか」、換言すれば、特定のものの見方・考え方がなぜ「ドクサ」（doxa：臆見）になるのかを追求した。バルトからすれば、「ドクサ〈中略〉とは、世論であり、多数派の精神であり、プチ・プルのコンセンサス、自然の声、先入観の暴力」(3) なのである。そのようなバルトが慎重に距離をとろうとしたのが、自ら（の研究）が主流（権威）になることである。その意味で、彼は自らも分析対象としていた。

このようなバルトが強く影響を受けたのが、言語学者ソシュール（Ferdinand de Saussure、1857 年～ 1913 年）の研究である。後に構造主義の祖のひとりと位置づけられるソシュールは、言語を「シーニュ」（signe：記号）とみなし、それを、「シニファン」（signifiant：記号表現〈意味するもの〉）と「シニフィエ」（signifié：「記号内容」〈意味されるもの〉）の両面を持った言語分析の単位として提出した。そして、それぞれの記号には、シニファンとシニフィエが結びつくに至った、なんらかの語源的な経緯や由来があるとしても、基本的に両者の結びつきは恣意的なものであると考えた。たとえば、「イヌ」という音響イメージ的なシニファンが、「犬」という概念的なシニフィエと結びついている必然性はない。事実、「犬」は、「イヌ」以外にも、“dog”“chien”“Hund”でもある（通じる）。この発想は、言葉の理解や運用の多元化につながり、同じものを見ても違う見方があり得るということの論理的な裏付けにもなり得る。さらに、この発想は、言葉はモノ（objet）の名前ではないこと、すなわち、名前がつけられる前からモノ自体が存在するのではない、という考えにまで至る。というのも、たとえば、もしも目の前に犬がいても、犬という概念や「イヌ」に相当する言葉をもっていなかった場合（そして狼や狸などの概念や言葉はもっていた場合）、犬は、なんだかわからないモノとされるか、別のモノ（狼や狸）として認識・処理されるのではないだろうか。つまりこれは、同じモノを見ていても、それが分かる（それ以外のモノから区別する）ためのシニファンやシニフィエ（特にシニフィエ）がなければ、（犬として）見えていないのに等しいからである。ソシュールの提出した記号理論は、少なくとも学術的に、言葉とモノに関する日常的な世界観の転換を迫るものであった。さらに、このようなソシュールは、当時の言語学ではカバーしきれていなかった部分、記号としての言語を研究する、記号学（sémiologie）の必然的到来を予言したのだった。

ソシュールを参考にしたバルトの活動は、文学批評からはじまり、やがては分析対象を記号とみなしたより広範な研究に移る。というのも、記号とは、狭義には、文字や、マークなどの何らかの意味が付与された図形を指すが、広義には、芸術作品をはじめさまざまな表現物、ファッションや行為、さらに、およそあらゆるモノまでを含むからである。そして、あらゆる対象を記号とみなす記号学とは、言語をはじめ、なんらかの事象を他の事象で代理し表現する記号の機能に注目し、文化、社会そのほかの、人間をとりまくなんらかの意味のある事象として記号の作用や構造を分析する学問である。バルト自身、音声言語や文字言語はもちろんのこと、絵画、シンボル、ジェスチャー、音楽、写真、舞台、建築、ファッション、広告ほか多分野に及ぶ対象を記号とみなし、その意味作用を研究した。われわれは、それら多種多様な記号が複雑に組み合わせられた世界で生きている。そこでは、無限ともいえる記号の組み合わせを通じて、社会的に意味のある事象が生み出され得る。しかしながらその社会は、ドクサが支配的な社会でもある。そこは、可変的なはずの記号がものの見方や考え方、価値観、権威、権力などと結合してわれわれの行動や感情の変化に影響し、それらを規定化・固定化する構造をもつ社会になっているとも考えられるのであった。

ここで、今後バルトの諸概念をみていくにあたり、便宜的に、本研究で考察の対象とする彼の主な著作、および、彼の教育経験など、今後考察に関連する出来事を年表にしておきたい。

1915 年　シェルブールで誕生（11 月 12 日）
1916 年　父親の死
1934 年　肺結核発病
1941 年　肺結核再発
1949 年　アレクサンドリア大学（エジプト）講師（～ 50 年）
1952 年　国立科学研究センター研修員（～ 55 年 [ 語彙論 ]、～ 59 年補助研究員 [ 社会学 ]）
1953 年　*Le Degré zéro de l'écriture*（『零度のエクリチュール』）
1954 年　*Michelet par lui-même*（『ミシュレ』）
1957 年　*Mythologies*（『神話作用』）
1960 年　高等研究実習院 ( ～ 62 年研究指導教授 )
1964 年　*Essais Critiques*（『エッセ・クリティック』）
*La Tour Eiffel*（『エッフェル塔』）
1965 年　新旧批評論争
1966 年　日本滞在 ( 5 月 )
*Critique et vérité*（『批評と真実』）
1967 年　日本滞在 ( 3 月・12 月 )
*Système de la mode*（『モードの体系』）
1969 年　ラバト大学（モロッコ）で講義 ( ～ 70 年 )
1970 年　*S/Z*（『S/Z』）
*L'Empire des signes*（『表徴の帝国』）
1971 年　*Sade, Fourirer, Loyola.*（『サド、フーリエ、ロヨラ』）
1972 年　*Nouveaux Essais critiques*（『新＝批評的エッセー』）
1973 年　*Le Plaisir du texte*（『テクストの快楽』）
1975 年　*Roland Barthes par Roland Barthes*（『彼自身によるロラン・バルト』）
1977 年　コレージュ・ド・フランス教授
*Fragments d"un discours amoureux*（『恋愛のディスクール・断章』）
母親の死 (10 月 25 日 )
1978 年　*Leçon*（『文学の記号学』）
1980 年　*La Chambre claire*（『明るい部屋』）
交通事故に遭う ( 2 月 25 日 )　死去 ( 3 月 26 日 )
1982 年　*L"Obvie et l"obtus*（『第三の意味』）
1984 年　*Le Bruissement de la langue*（『テクストの出口』）

1985年　*L'aventure sémiologique*（『記号学の冒険』）

この年表中、原題に続く『』は邦題である。引用にあたっては、邦訳のあるものについては、それを確認した上で、必要に応じて古市の翻訳を使用する。また、先行研究の中でも、渡辺諒『バルト　距離への情熱』と桑田光平『ロラン・バルト＝Roland Barthes 偶発事へのまなざし』を、本研究でおおいに参考としている(4)。それらにおける翻訳も必要に応じて借用したい。いずれにせよ、翻訳はすべて古市の判断によることを記しておく。

## 2．バルトの研究の変遷－本研究で用いる諸概念を中心に－

それでは、本研究ではバルトのどのような概念を用いるのか。彼の研究の変遷をたどりながらまとめよう。

バルトは、ソシュールに学んで以降、さまざまな記号学的研究をしてきた。ただしその時期は、記号学構築の途上の時期でもあった。つまりバルトは、生涯を通じて、ある確定的な記号学の手法をもって、記号の分析をおこなったのではない。彼の記号学は、時期とともに変遷してきた。それは、内容が変化してきたというよりも、いくつもの位相をもっているという方が適切である。このことについて、1974年の時点でバルトが自分の研究を三期に分けている(5)、その区分に沿いながら諸概念をみていきたい。

### (1)《第一期：驚嘆（emerveillement）の時代－ランガージュ（langage；言語活動）、より正確にはディスクール（discours；言説）が分析対象であった時期》

この頃バルトはソシュールを読み、希望とともに目のくらむ思いをしたという。なぜならば、従来は場当たり的に表明するだけだった（プチ）ブルジョアジーの神話の告発を科学的に展開できると考えたからである。では、「ブルジョアジーの神話」とはなにか。これについて、バルトは、“*Mythologies*”の中で次のように記している。

> ブルジョワの偽―自然〔pseudo-physis〕は、人間が自己をつくり出すことの全面的な禁止である。神話とはたえまなく、疲れを知らないこの懇願、油断のならない、屈することを知らないこの要請にほかならない(6)。

バルトにとって神話とは、歴史的な産物を（偽）自然に作り替えるものであり、記号の体系を事実の体系にすり替えるものである。そして、（偽）自然と事実の体系、すなわち、作り替えられた・すり替わえられた「当然」を前にした人間は、自己を考え直したり疑問をはさんだりする余地はなくなる。しかも神話は、「懇願」や「要請」のかたちをとり、人々に受け入れてもらうことで成り立つ。弱い立場であるはずなのに強い影響をもっている。バルトにとって、そのような神話を明らかにする科学的な手段が記号学だった。換言すれば、記号学は、「イデオロギー批判の根本的な方法」であった。ある考えが社会的に支配的になったものがイデオロギーである。バルトは、その支配的になる過程を記号学の手法を用いて明らかにしようとしたのだった。

もっとも、神話の分析よりも以前、当初のバルトの活動は文学作品の批評であった。その頃のバルトの主要著作のひとつが“*Le Degré zéro de l'écriture*”である。ここで、彼の名を一躍有名にした「エクリチュール」(écriture)という概念が提出された。もともとそれは、フランス語で一般的に「文字で書かれたもの」「書き方」「書体」「書くこと」などの意味をもつ言葉であるが、バルトはそれらとは異なった概念としてエクリチュールを提出した(7)。では、それはどのような概念なのか。

バルトは、“*Le Degré zéro de l'écriture*”のはじめの箇所で、エクリチュールを、「ラング」(langue)と「スティル」(style)に対比的に、次のように定義している。

> ラングとスティルは盲目的な力だが、エクリチュールは歴史的な連帯行為である。前二者はオブジェだが、後者は機能である。すなわち、エクリチュールは創造と社会のあいだの関係であり、社会的用途によって変形された文学的な言語であって、人間的意図において捉えられ、このようにして〈歴史〉の大きな危機に結ばれる形式である(8)。

バルトは言語活動を三層に分けて考えた。まずは「ラング」。これには、かなり規模の大きな言語集団に共通の国語や母語などが相当し、気が付けば既に使われているルールのようなものである。次に「スティル」。これには、言語運用上の個人の生理的・心理的な偏差である、文の長さやリズム・改行の仕方などが相当し、気が付けば既にあたり前のことになっている個人的な嗜好のようなものである。

気が付けばそれが当然のことになっている層に位置するラングやスティルに対し、もうひとつの層にある、「創造と社会のあいだの関係」、「人間的意図において捉えられ、〈歴史〉の大きな危機に結ばれる形式」であるエクリチュールとはなにか。バルトは次のように続けている。

> ある言語学者たちは、「単数―複数、過去―現在」というようなある極性を帯びた二項の中間に、第三項、すなわち中立的な、あるいは零度の項〔terme degré zéro〕を立てる。この説によれば、直説法は、接続法と命令法の中間にあって、あたかも無―法的なもののように見える。話の水準は違うが、零度のエクリチュールとは、要するに、直説法的エクリチュール、あるいは、無―法的エクリチュールとする方が適当なものである。〈中略〉中立的な新しいエクリチュールは叫びと判決の中間に位置して、いずれにも加担しない。そのどちらもが欠けている。それがこの新しいエクリチュールをかたちづくる。〈中略〉それを無感動のエクリチュールと呼ぶこともできるが、むしろ無垢のエクリチュール〔écriture innocente〕と呼ぶべきだろう(9)。

エクリチュールは「中立的」なものであり、それは、ラングとスティルを両極としている。前者は「判決」に、後者は「叫び」に相当する。バルトは、社会的に規定される前者と、個人の好みが表出される後者、それらから中立的な言葉の使い方としてのエクリチュールを考えていたといえるであろう。

両極にあるラングとスティルには選択の余地がない。それらは盲目的、すなわち絶対的である。われわれは、気が付けばある言語に満ちた世界の中で生き、一方では集

団的な国語で書き、もう一方では個人的なリズムで話している。そうした言語活動（運用）が当然のこととしておこなわれていて、これは各自の選択の結果ではない。ラングとスティルに対し、エクリチュールには選択の自由がある。たとえば、学者になりたければ学者らしいエクリチュールを用い、アスリートになりたければアスリートらしいエクリチュールを用いるように、自らが欲する集団に入るときに選択がおこなわれる。その時、「無垢のエクリチュール」が表れる。

ただし、自由は長くは続かない。一端選択すれば、そのあとは自分が帰属を決めた集団の成員としてふさわしい言語活動をおこなわなければならなくなる。バルトは、エクリチュールには「袋小路」があると考え、次のように記している。

> エクリチュールには袋小路があり、それは社会そのものの袋小路と同じものである。今日の作家たちはそれを感じている。だから、彼らが非文体的な文体、あるいは口語的な文体、エクリチュールの零度、あるいはエクリチュールの口語的なレベルを探求するのは、要するに、社会の絶対的に均質的な状態の先取りなのである(10)。

あるエクリチュールは、それが一般的なある集団や社会的立場にふさわしい言語活動をおこなわなければならないこととワン・セットになっている。あるエクリチュールを選ぶということは、選択した者が、その集団の成員として相応しい服装、生活習慣、マナー、宗教、価値観、人生観ほかをもつように要求されることを意味している。エクリチュールの分析・提出によって、バルトは、気が付けばわれわれが言語的、したがって社会的にも、いかに縛られているかを示すとともに 、その状態からの脱出の術を探っていた。

### ⑵《第二期：科学（性）の時代－服飾の「モード」（Mode）という、高度に記号化した対象の記号学的分析を進めようとした時期》

この頃のバルトの主要著作のひとつが“*Système de la mode*”である。その中で彼は、「欲望を起こさせるものはモノではなく名前である。人にモノを売るのは、夢ではなく意味のしわざなのである」(11) と語っている。たとえば、ある年のモードとして、ミニ・スカートが流行ったとする。ミニ・スカート自体になんらかの決定的な欠陥がありスカートとしてはもはや用をなさないというわけではないのに、次の年にはマキシ・スカートが流行る。同様に、一時期注目されたある理論が、その有効性をたいして失わないままに忘れ去られる。そしてその次に、よく似た理論ではあるが以前とは違う「名前」をもち、装いを新たにしたもの、つまり、新しい意味をもったものが注目される。なぜこのようなことがおこるのか。バルトは、このような、意味のなせるわざを、流行り廃りのあるモードにみようとした。そして、過去から現在に至るモードを分析することで、そこに法則性を見つけようとした。このときの彼が、意味の成立過程を明らかにするための分析的な概念として用いたのが「デノタシオン」と「コノタシオン」である。

デノタシオンは、明示的意味であり、「メッセージ」(message) に相当する。これに対し、コノタシオンは、暗示的意味であり、「メタ・メッセージ」(meta-message)

に相当する。つまり、コノタシオンはデノタシオンの読み方を示す、いわば、メッセージの読み方のメッセージである。ちょうど暗号解読機（コード）が異なれば、同じメッセージでも異なる読み方がなされるように、コノタシオンが異なればデノタシオンの意味も異なってくる。さらにバルトは、「コノタシオンは、一般的に情意的もしくはイデオロギー的な第二の意味を支える第一のメッセージもしくは文字通りのメッセージに、きわめて社会的な言葉をさらに浸み込ませる」(12) と考えた。先の「無垢のエクリチュール」を用いれば、コノタシオンは、「無垢」であったデノタシオンを「社会的な言葉」というさまざまな色で染めていくことになる。このように、バルトは、ある特定の意味の生成過程を、コノタシオンとデノタシオンを用いながら明らかにしようとしたのである。

さらに、この時期バルトがしばしば使用した概念に「レトリック」(rhetoric) がある。コノタシオンとデノタシオンの関係は一回性のものとは限らない。シニファンとシニフィエがシーニュを形成していたように、コノタシオンとデノタシオンは融合して新たなデノタシオンとなり、そこに新たなコノタシオンが生じるといった、まるで、人形の中からまた人形が出てくるロシアのマトリョーシカ人形のような「入れ子構造」がそこにはある。そしてレトリックは、コノタシオンとデノタシオンの体系をまとめる、より高次な体系である。バルトは、コノタシオンとデノタシオンの関係を次のように図式化した (13)。

<table>
<tr><td>3（Ⅲ）</td><td colspan="3">E（Sa）<br>交通指導員に特有の表現</td><td>C（Sé）<br>交通指導員の「役割」</td></tr>
<tr><td>2（Ⅱ）</td><td colspan="2">E（Sa）<br>／赤は禁止の記号／<br>《文》</td><td colspan="2">C（Sé）<br>「赤は禁止の記号です」<br>《命題》</td></tr>
<tr><td>1（Ⅰ）</td><td></td><td></td><td>E（Sa）<br>赤の知覚</td><td>C（Sé）<br>禁止の状態</td></tr>
</table>

E：表現（expression）　　*Sa*：シニファン
C：内容（contenu）　　*Sé*：シニフィエ

1　現実のコード　　Ⅰ：現実の道路標識のコード
2　分節言語：用語の体系　　Ⅱ：用語の体系
3　分節言語：レトリックの体系　　Ⅲ：レトリックの体系

この図を文章化すると、「アカ」と結びついた「赤」が禁止の意味と結びつき、「赤は禁止の記号」という文章が成り立つとともに、それは真であるという命題になり、「赤は禁止の記号です」は交通指導員に特有の表現になるとともに、そう表現することが

交通指導員の「役割」である、となる。この中には、先にみたコノタシオンとデノタシオンの関係に相当するパターンが多層的にある。多くのより小さな構造が、ひとつのより大きな構造になっていく。理論的にはいつまでも続くような構造ではあるが、現実的にそう感じないのは、レトリックのレベルで、あやふやなまま構造が解消するからである。バルトは、モード雑誌の中に紹介されたモードを分析した。当然のことながら、それは現実のモードではない。しかし、偽－モードもしくは未－モードとでもいうべきものが、モードを形成する。そこではどういうことがおこなわれているのか。バルトは、

> モードにおいては、シニフィエ同士の中性化が容易に生じ、そのためにその語彙体系が厳密さをまったく失ってしまう危険性があるが、モードがそれを意に介さないのは、書かれたものの最終的な意味が衣服のコードというレベルにおいて実現されるのではなく(さらにその用語による表現というレベルにでもなく)、レトリックの体系というレベルにおいて実現されるからである(14)。

としている。モードは、雑誌の記事と実際の衣服との関係において決まるのではなく、実際の衣服と異なるレトリックの体系のレベルで決まる。レトリックとは、バルトが、「モードにおける新しさとは、人間が生きていくために欠くことのできない、知的に理解できるものと、人生の神話につきものの予想不可能なものとを、世にも不思議なやりかたで結合したもの」(15) というときの、「世にも不思議なやりかた」に相当し、それは、モードの中に、「知的に理解できるもの」と「予測不可能なもの」とが集合したイデオロギーを形成する。

このようにして、コノタシオン、デノタシオン、そしてレトリックなどの概念を用いて、科学的な記号学を打ち立てようとしていたバルトは、しかし、自身がその企図よりも、ひとつの「分類法」を実行する快楽によって支配されていたと後にふり返っている。分類の作業のうちにある一種の陶酔、バルトにとって、科学の段階における記号学は、そうした陶酔そのものだった。彼の関心は、典型的な固定したコードによる、固定した意味作用に対してだけではなくなっていた。というのも、科学的なディスクールは自らを上位コードと信じ、新しい文学理論を求める人々は文学を読み取る理論も科学的であることを求めているが、バルトからすれば、上位コードとしての科学はイデオロギーだからである。それにもかかわらず、記号学の依って立つところを科学に求める場合、科学はドクサであり、覇権を握ることになってしまう。

### (3)《第三期：テクスト（Text）の時代－構造的なモデルを捨てて、無限に異なるテクストの実践にうったえる時期》

この時期は、フランスから、世界的に影響を与えた新たな思想が続出した頃である。バルトのみならず、レヴィ＝ストロース（Claude Lévi-Strauss、1908年～2009年)、クリステヴァ、デリダ（Jacques Derrida、1930年～2004年)、フーコー（Michel Foucault、1926年～1984年)、ラカン（Jacques-Marie-Émile Lacan、1901年～1981年）らが、文化人類学、哲学、精神分析などの分野で、既存の自明の理と思われたものを

揺るがせる、新しい概念を提出していた(16)。これらの研究者の視点は構造主義とよばれ、(本人は嫌がったが）一般的にはバルト自身その中に位置づけられる傾向があった。それらの研究者からの影響を受けつつ（特にラカンの影響が大きい)、バルトが提出したのが「テクスト」という概念だった。

それは現在一般的に、「本文」、「原本」、「教科書」、「文章」などを意味するが、この時期のバルト彼の主要著作のひとつ“*Le Plaisir du texte*”において、彼は次のように記していた。

> テクストとは、「織り上げられたもの」という意味である。これまで人々は、このような織物を製造されたもの、その背後に何か隠された意味 ( 真理 ) を潜ませている作られた遮断幕のようなものと思いこんできた。今後私たちは、この織物は生成的なものであるという考え方を強調しようと思う。すなわち、テクストは終わることのない絡み合いを通じて、自らを生成し、自らを織り上げてゆくという考え方である。この織物－このテクスチュア－のうちに呑み込まれて、主体は解体する。まるで、自らの巣が作る分泌物に溶解してしまう蜘妹のように(17)。

ここにある解体する「主体」とは、テクストの作者のことである。それまで、作品（テクスト）は、まず作者がいて、書かれ、書かれたものが完成品として読者に供されるという認識が一般的だった。しかしバルトによれば、作品は完成品ではなく、供された後も「生成的」であるという。そして、その生成の過程では、作者は「溶解してしまう」。

これはどういうことだろうか。この後バルトは、テクストについて次のようにも記していた。

> ひとつのテクストは、いくつもの文化からやって来る多元的なエクリチュールによって構成され、これらのエクリチュールは、互いに対話をおこない、他をパロディー化し、異議をとなえあう。しかし、この多元性がひとつに集結する場がある。その場とは、これまで述べてきたように、作者ではなく、読者である。読者とは、あるエクリチュールを構成するあらゆる引用が、一つも失われることなく記入される空間にほかならない。あるテクストの統一性は、テクストの起源ではなく、テクストの宛て先にある(18)。

様々なエクリチュールを選択し、それを用いてテクストを織り上げるのは作者であるが、エクリチュールは作者による完全な創作物ではない。子どもに両親がいて、その両親それぞれにまた両親がいるように、ある作者の前に別の作者がいて、さらにその前に別の作者・・・と、意識的にせよ無意識的にせよ、ひとつの作品は、それぞれの作者の多元的なエクリチュールが流れ込んで成り立っている。さらに、最終的にそれが集結するのは、読者の読書によってである。読者の手に渡った作品は、作者の意図やそこに込めた意味とまったく同じく読まれはしない。なぜならば、作者と読者はそれぞれ異なった「身体」だからである。

すでに述べたように、エクリチュールには、言語活動における数少ない自由な選択ができる機会であった。ではその自由はだれにとってのことなのか、自由の主体とは

なにか。バルトは、その主体が、それぞれ異なった主観をもつこと以上に、異なった身体をもつことに注目していた。

私に快楽を与えたテクストを《分析》しようとする度に、私が見出すのは、私の《主観性》〔subjectivité〕ではなく、私の《個人》〔individu〕、つまり私の身体を他人の身体から区分し、私の身体に固有の苦痛や快楽を与える与件〔donnée〕なのである(19)。

個人を個人たらしめているものが身体である。身体とは、それまでに経験してきた教育、社会的階級、小児期の自己形成などをはじめ、歴史的・社会的な諸要素がしみ込んだものであり、そのような身体は、自分自身の「(文化的)快楽〔plaisir〕と(非文化的)享楽〔jouissance〕の矛盾した働きを調整する」(20)。つまり、身体とは、さまざまな差異をもって集団に対する個人を見いだすとともに、個人の内的な調整をおこなうものである。バルトにとって、テクストの快楽とは、「私の身体がそれ自身の考えに従おうとする瞬間である―私の身体は私と同じ考えを持っていないから」(21)だった。

作者が「溶解してしまう」のは、読者がなければ作者はないからである。たとえば、教師が、生徒のいない教室でどれほどすばらいい授業をおこなったと、本人が感じたとしても、それは授業とは認められないであろう。それと同様に、作者は読者を必要としている。両者の関係の中でテクストは生成される。バルトは、

テクストの快楽は、より深い方法で完成される(この時にこそ、われわれは《テクスト》があると真にいうことが出来る)。それは《文学的》テクスト(書物)がわれわれの生の中へと移住してくる時であり、ある別のエクリチュール(他者のエクリチュール)がわれわれ自身の日常性の諸断片を書くに至る時であり、要するに一つの共−存在が生じる時なのである(22)。

と、テクストが生成するときの、作者と読者、エクリチュール同士の「共−存在」を指摘している。その前にあって、テクストの主人たる作者は消滅する。

ここまでの小括としてこれら三期をまとめてみよう。

当初のバルトは、われわれが言語を自由に用いているようでいて、実はそれに縛られていることに着目し、その状態から逃れる方向を模索していた。縛られていることと、一瞬であっても逃れる術を示したのがエクリチュールの概念である。バルトの記号学は、そのための言語学的な記号分析だった。それは、いかにして特定のディスクールがイデオロギーとなり、ドクサになるのかを明らかにするためのものだった。その後、自身の記号学を科学として分析を精緻化する過程で示されたのが、コノタシオン、デノタシオン、レトリックなどの概念である。それによってバルトは、シニファンとシニフィエが構造化する仕組みからはじまり、それらが位相を変えて最終的に昇華するような仕組みまでを論じた。このとき彼が懸念したのは、記号学が、科学になることで、逆に支配的なディスクールになること、すなわち、記号学が権威化することだった。そうではない記号学、それはもはや記号学から離れたものとなっていたかもしれ

ないが、バルトはここにたどり着いた。そしてテクストの概念によって、作者と読者の双方向的な関係の中で、テクストが生成し深化していくことが示された。最後は読者に任せるしかない立場にある作者にできること、それは、閉じた記号集合ではなく開き転移しつつある痕跡の総量としてのテクストの実践であり、彼はむしろそれの快楽を見出した。

それでは以上のようなバルトはどのような教育論を示したのか。

（本稿つづく）

## 註

（1） キース・A・リーダー（本橋哲也訳）『フランス現代思想』講談社、1994 年、268 ～ 269 ページ。

また、バルトの存命中、すでにシャリュモー（Jean Luc, Chalumeau：1939 年～）は、「現在進行中のイデオロギー的な地殻変動、とくに文学の領域における変動の中心にはまずロラン・バルトの姿がある。バルトこそは文学的テキストと映像（イマージュ）へのアプローチを一新する現代的研究の先駆者であり創始者である。」（ジャン＝リュック・シャリュモー（加藤晴久訳）『現代フランスの思想』大修館書店、1981 年（原書：1974 年）、174 ページ）、と記している。

（2） たとえば近年では、石川美子『ロラン・バルト －言語を愛し恐れつづけた批評家』（中公新書、2015 年）がある。

（3） Roland Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes,* Œuvres complètes, tome Ⅳ :1972-1976,Éditions du Seuil, Paris, 1995, 627.

（4） 渡辺諒『バルト　距離への情熱』白水社、2007 年。
桑田光平『ロラン・バルト＝ Roland Barthes 偶発事へのまなざし』水声社、2011 年。

（5） Roland Barthes, *L'aventure sémiologique*, Éditions du Seuil, Paris, 1985, 10-13

（6） Roland Barthes, *Mythologies*, Œuvres complètes, tome Ⅰ :1942-1961, Éditions du Seuil, Paris, 1993, 865.

（7） バルトが提出した「エクリチュール」は、現在辞書に載るほど普及している。たとえば、「感情移入を排した中性的文体．ロラン•バルトの用語」（『小学館ロベール仏和大辞典』小学館、1988 年、841 ページ）。

（8） Roland Barthes, *Le Degré zéro de l'écriture*, Œuvres complètes, tome Ⅰ :1942-1961, Éditions du Seuil, Paris, 1993, 179-180.

（9） Ibid., 217.

（10） Ibid., 225.

（11） Roland Barthes, *Système de la mode*,Œuvres complètes, tome Ⅱ :1962-1967, Éditions du Seuil, Paris, 1993, 900.

(12) Ibid., 929.
(13) Ibid., 930 ～ 932.
なお、これはバルトが何段階かに分けて示した複数の図式を古市が一つにまとめたものである。
(14) Roland Barthes, *Système de la mode*,Œuvres complètes, tome Ⅱ :1962-1967, Éditions du Seuil, Paris, 1993, 1107.
(15) Ibid., 1200.
(16) ここに名前が登場するレヴィ＝ストロースほかについて、以下のように、その共通点を内田樹が端的に語っている。
レヴィ＝ストロースの人類学もフーコーの社会史もラカンの精神分析もバルトの記号論もアルチュセールのイデオロギー批判も、「私」を透明で中立的な観想の主体として不当前提することへのきびしい節度を共有している。
（内田樹「解説：死者が許さない」（J. =M. ドムナック（伊東守男他訳）『構造主義とは何か』）平凡社、2004 年、358 ページ）。
この指摘は、バルトが、自身や自身の研究が権威となることをひじょうに慎重に避けていたことと合致するといえるだろう。
(17) Roland Barthes, *Le Plaisir du texte*, Œuvres complètes, tome Ⅳ :1972-1976, Éditions du Seuil, Paris, 1995, 259.
(18) Roland Barthes, *La mort de L'auteur*,Œuvres complètes, tome Ⅲ :1968-1971, Éditions du Seuil, Paris, 1994, 45.
(19) *Le Plaisir du texte*, 258.
(20) Ibid., 258.
(21) Ibid., 228.
(22) Roland Barthes, *Sade, Fourirer, Loyola.*,Œuvres complètes, tome Ⅲ :1966-1971, Éditions du Seuil, Paris, 1994, 704.

（引用文中の〔　〕カッコ内は古市による。）

なお本稿は科研研究課題（15K13193）の一環である 。